

本会員に求められること  
いつくしみの特別聖年にあたって

イエズス会日本管区長 梶山義夫



二〇一五年二月八日の無原罪の聖マリアの祭日から、二〇一六年一月二〇日の王であるキリストの祭日まで、教会はいつくしみの特別聖年を祝う。その中で、会員に求められていることをいくつか挙げたい。

まず、神のいつくしみについて、祈ることが

重要である。沈黙の価値を取り戻して、神のこ  
とばをじっくりと聴き、喜びの源であり、静け  
さと平和の泉であるいつくしみ、特に御父のい  
つくしみのみ顔であるイエス・キリストを観想  
するように招かれています。この観想は抽象的  
な思考ではなく、わが子のことからだの奥か  
らわき起こる親の愛のように、神が御自分の愛  
を明かす具体的な現実、実に「はらわたがちぎ  
れるほどの」愛を日々の生活の中に見いだす  
日々の歩みである。この世界について、神不在  
であるとか、ますます墮落していると断罪する

ことは簡単であるが、それではこの世界の中に  
隠れた形で静かに働く神のいつくしみに気づく  
ことができない。私たちのために自らを無にさ  
れたイエスの眼を自らの視点として、社会の中  
に、また出会う一人ひとりの中にいつくしみを  
発見したいものである。

また、いつくしみを生き、その真の証人であ  
るように招かれている。自分を傷つけた相手を  
ゆるすことは、いつくしみの愛をもっとも明白  
に示す表現であり、ゆるしはわたしたちの弱い  
手に与えられた道具である。わたしたちは共同  
体の中で、また派遣された場でこの道具を活用  
するように求められている。わたしたちの共同  
体としての証しは、共同体が構成員同士のゆる  
しのあるか、また共同体としていつくしみを  
証しているかにかかっている。司祭である  
会員は、聴罪司祭としていつくしみの真のしる

しでなければならぬが、そのためには自らかゆるしを求める痛悔者でなければならぬ。司祭だけではなく、すべての会員がゆるしの道具となるために、回心の道を常に歩むことが、私たちの修道生活の生き方である。この生き方は、人々の間の和解を求める生き方である。憎しみと不信によって煽られた暴力の連鎖が後を絶たず、抑止力を強化する政策が立てられていく中で、現実的な平和はいづくしみに基づいてこそ形成されることを力強く証しなければならぬ。

この聖年に特に経験すべきことは、自分とはまったく異なる周縁での生活を送るすべての人に心を開くことである。今日の世界の中には、どれだけの傷が、もう声を上げることができない多くの人の肉体に刻まれていることか。わたしたちはこれまでも増してこの傷の手当てをし、慰めの油を塗り、いづくしみの包帯を巻き、連帯としかるべき気遣いをもって世話をするよう呼びかけられている。そのために、貧困という悲劇を前にして眠ったままであることの多いわたしたちの意識を目覚めさせ、貧しい人が神のいづくしみの優先対象であるという福音の核心をよりいっそう深く理解しなければならぬ。貧しい人をことばと行いで慰め、現代社会

における新しい奴隷制の犠牲者に解放を告げ、自分のことだけを見て何も見えなくなっている人に見る力を回復させ、尊厳を奪われた人にそれを取り戻すという使命を忠実に果たすことは、イエスに従おうとするわたしたちの使命である。

今年も新司祭が誕生した。角田佑一神父である。彼が私たちと共に、神のいづくしみに活かされ、神のいづくしみを生き、神のいづくしみを証する司祭・修道者として、生涯を捧げることを願って止まない。

(イエズス会日本管区長)